

「カサブランカ」

宮城県岩沼市立岩沼北中学校

三年 角 田 芽 唯

カサブランカの花の香りがするお線香に火をつける。写真の中で微笑む父に手を合わせる。そして、「私は、幸せです。」とつぶやく。これが私の日課です。

二〇一一年二月一〇日。父は末期がんを患い、胃の全摘手術を受けました。八時間にも及ぶ開腹手術で、呼吸器専門の医師がもしものために立ち会うなど、大手術でした。無事に終わることができましたが、ベッドに横たわる父の姿に、いつも穏やかな父の姿はなく、怖くて直視することができませんでした。

父は術後、生きがいの仕事に二ヶ月という早さで復帰しました。私にはまるで「早く、早く」と生き急いでいるように感じました。

その心配は的中し、去年の秋にがんが骨へと転移しているのが見つかりました。医師からは「骨だから進行が遅い。長い付き合いができる。」と言われ、ほっと胸を撫で下ろしたのもつかの間。突然、がんは非情にも、転移していました。今年の六月、父は「がん性髄膜炎」を発病したのです。

「がん性髄膜炎」とは、脳や脊髄の表面にがん細胞が増殖する病気です。意識障害を起し、脳の内部に浸透してしまつたため、多種多様な症状を引き起

こすのです。また、「亜急性」という診断も受けました。「亜急性」とは「急性」と「慢性」の間ということです。父にとつての「亜急性」は「余命が一〜二週間」ということでした。もう、治らないのです。

その二日後、父は再び倒れました。それから父にとつて地獄の日々でした。次第に増す痛み。思うように身動きができなくなっていく体。身近で見守ることしかできない私にも、刻一刻と父が病魔に侵され、弱っていくのが嫌でも分かりました。今度は、父のすぐそばで父が病氣と闘う姿を見ることができました。でもそれは、私が心のどこかで「今、父を見ておかなければ。」と勝手に諦めていたからです。私はひどい娘です。けれども、父は病氣自体を治す積極的な治療を決して諦めることはありませんでした。父は「生きる」ということを諦めることはありませんでした。

現在では、ほとんど行われていない抗がん剤を直接骨髄にいれる髄注治療。この治療で劇的な効果があった人もいましたが、リスクの方が高く、今は一般的には行われなくなった治療法でした。でも、これは、父にとつて最後の希望の道でした。亡くなる前日にも、この髄注治療を行いました。

七月七日、午後九時ちようど。父は帰らぬ人となりました。

「どうしてこんなことになったの。」

「幸せに暮らしたかっただけなのに。」

「どこで間違つたの。」

いろんな感情が渦巻く中、私たちは父と一緒に我が家に帰ってきました。望んでいた形とは別の形で。父の顔に被せてある白い布を、そつとめくると、涙がとまりませんでした。最後の父の顔は微笑んでいたのです。

さっきまでの思いが晴れていくようでした。

私たちは選択だらけの毎日、正しい道や間違っている道、たくさんの道があるのです。そのたびに何かを選び、大丈夫だろうかと不安の中で生きています。どれも正しい道かなんて誰にも分かりません。後悔したこともありましたが、でも、最後に自分が「良かった」と笑うことができたのなら、それは「幸せ」ということではないでしょうか。あの時あの道を選んでいたからこそ「幸せ」なのです。結果がダメだからと、今までの努力に意味がなかったということはないのです。最後に全ては自分の幸せの一部にすることができるようから。

死を目前にリスクの高い治療に挑戦した父もきつとこう思つて、人生の最後の貴重な時間を生き抜いたのでしょう。だから父は、最後に微笑むことができたのだと分かりました。

父は、自分の人生をひたむきに生きることで私に大切なことを気付かせてくれました。

「幸せの意味」「諦めないこと」

今日を迎えられなかった父が残してくれた大切なことを心に刻んで生きていきます。

「私は、幸せでした。」父が亡くなって、後悔はありません。でも、私は可哀想な娘ではありません。

「私は、幸せです。」父の娘として、今日を生きることができて。こうして「幸せ」に生きることができて。でも、私はまだ幸せを求めて生きていきます。諦めずに、これからも父と共に。

カサブランカの花の香りがするお線香が燃え尽きました。カサブランカは、父が好きな花です。花言葉は「威厳」まさに、父そのものです。

父に対しての自分の想いを何か形に残すことはできないのかと考えているときに、先生に作文を書いてみないかと声をかけていただきました。文章にすることで、私の想いも浄化されたように感じます。入賞し、たくさんの人たちに父のことや私の想いを知ってもらうことができ、とても嬉しいです。本当にありがとうございました。

作文を書くに当たって